

40 土倉庄三郎翁造林頌徳記念磨崖碑

—日本の造林王と呼ばれる人です—

憲司君、お手紙ありがとうございます。今度の日曜日に、もくもく館に出かけるとか。では、もう少しお話ししておきましょう。

もくもく館から少し行くと川の向こう側の崖に「土倉翁造林頌徳記念」という大きな文字が見えてきて、道沿いには土倉庄三郎さんの銅像が立っています。彼は吉野の美林を育て上げた人で、奈良県教育委員会作成の小・中学校道徳教育郷土資料に「庄三郎の鎌」という話が出ています。

この話は「天にもとどくかと思うぐら
いまっすぐな杉の木。どんな風雨にも大地にどっしりと根をおろして堂々としている木々。この美しい林相の吉野の山々が一朝一夕に実現したのではない。そこには、先人の並み並みならぬ努力があったのである」という書き出しで始まります。



彼は長年の研究の末、1ha にスギとヒノキ合わせて1万本を混植し、成長とともに間伐して木の本数を減らしていく土倉式造林法を考え出しました。このとき、村人からは「土倉のだんなは、なんぼほど山があつたら気がすむのやろ。勘定でけんほどあるのに……。まだ木の増やし方を、毎日山にこもって考えとんねと、だんなも欲が深いなあ」と言われたそうですが、彼の考えていたのは「この方法で林業を盛んにして国の富を増し、人々の暮らしも

豊かにし、洪水や水不足を防ぎ、木材を十分に供給したい」ということでした。

そして、荒れた山を地主から借りて、苗を植え、下草を刈り、枝打ちをし、といった山の仕事を地元の人たちにさせることで人々の暮らしを安定させ、地主には伐採したときの収益についての契約を交わしたといいます。土倉さんは、自分のためではなく、吉野の山の木であれば誰のものでも立派に育てようとしたのです。こんなことを「庄三郎の鎌」の抜粋から読み取ってください。

見学に来た学生が「土倉さん、吉野の山の木はどうして立派なんですか？」と尋ねたとき、彼は、笑みをうかべながら無言で鎌を見せた。そして、少し先まで歩いたとき、道からそれて下の方へ降りていった。危ないからと引き止める人夫に「心配するな。道で待っておれ」と言い、木に何かを語りかけながら、先ほどの鎌で杉に巻きついたつるを懸命に切っている。人夫の1人が「だんなさあん、そこは隣村の吾作さんの山ですよー」と大声で叫んだが、彼は耳をかさず、つるを取っている。しばらくして満足そうな顔で登ってきた彼に「他人の山のつるなんかどうして切るのですか？」とけげんそうな顔で聞くと、「生きていくつらさは人間でも杉の木でも同じだ。風雪に耐え必死に伸びる杉の木には頭が下がるよ」と答えた。これが学生たちへの答えだった。

土倉庄三郎は相続した莫大な財産を費やし 70 余年の人生を造林にかけました。そして今、吉野の杉山は、全国に比類のない美林だと賞賛され、品質の良い木材を産出し、日本の林業先進地としての重要な

役割を果たしています。

もくもく館を見学した後、少し足を延ばして、庄三郎の熱い心を感じてきてください。

(平成 21 年 10 月・中学校 1 年生の憲司君宛て)

スポットの案内

土倉庄三郎さんの銅像は奈良交通バス「大滝」停にあり、対岸の岩壁に「土倉庄三郎翁造林頌徳記念」という字が刻まれています。

理科のワンポイント「土倉庄三郎と造林法」

土倉庄三郎は 1840 年、今の吉野郡川上村大滝に生まれました。幼名の丞之助を庄三郎と改め、家業を継いでから、木材搬出のためのいかだ流しのために吉野川を改修しました。また、道づくりのために山林評価額の 20 分の 1 の金額を道路建設のために出すように説得し、自分は莫大な私財を投入して、道路を完成させています。

彼の考えた造林法は、スギとヒノキの苗木を混ぜて密植し、ていねいに世話をし、間伐し、少数の木を大事に育てるというものでした。こうした方法で多くの優れた材木を生産できるようになりました。

この土倉式造林法を紹介した「吉野林業全書」は、今も造林のバイブルになっていると聞きます。また、静岡県天竜川流域、群馬県伊香保のほか、台湾にまで出かけて、造林を指導、ダムを建設しています。また、奈良県最初の小学校を川上村に開設したほか、同志社大学、日本女子大学の創立にも巨費を提供しています。儲けの 1/3 は教育に、1/3 は社会貢献に、残り 1/3 は自分の事業にというのがモットーだったそうです。